

## 平成30(2018)年度 追手門学院中学校・高等学校 学校評価

### 1. めざす学校像

学院教育理念「独立自彊・社会有為」を、すべての教育活動の基軸に据えて取り組む。  
校地移転を機に、学校としての総合力を大きく向上させ、「個別の学び」「協働の学び」「プロジェクト型の学び」の融合により、他校の追随を許さない新たな学びとその成果を全国に発信できる学校へと生まれ変わる。

### 2. 中期的目標

新校地移転を機に学校としての総合力を大きく向上させ、他校の追随を許さない教育を展開する学校へと生まれ変わるため、2018年度はその重要な準備期間となる。学院の130周年という節目の年であることも活用し、また、両中高の70周年に向けた取り組みでお互いの教育力をレベルアップさせる教育実践を進め、それを積極的に社会に発信することで、大きな変革を起こす元年とする。

- (1) キャリア発達を軸とした授業の改善に集中し、生徒の学力と進学実績の大幅な向上を実現する。
- (2) 学校評価をもとにした生徒・保護者の満足度向上に組織的に取り組む。
- (3) 全教員が経営マインドを持ち、安定した生徒募集の基盤を作り上げる。
- (4) 学院創立130周年、両中高70周年の節目の年を意識し、社会に大きくアピールできる取り組みを行う。
- (5) 高大接続・高大連携の取り組みを充実させ、総合学園としての教育力向上につなげる。

### 3. 自己評価アンケートの結果と分析・学校委員会からの意見

自己評価アンケートの結果と分析【2018(平成30)年11月実施】	学校関係者評価委員会からの意見
<p>○生徒 ・安心・安全な学校という面では、例年以上に評価が高かった。6月の大阪北部地震があり、施設面では随分生徒に不自由な思いをさせたが、生徒たちが協力的であったことが、この評価に表れている。 ・新しい教育に関する項目では評価が高かった。ICT機器を活用した授業が定着してきており、新しい学びのスタイルに対する生徒からの評価が高まってきたからだと考えられる。一方、学習習慣を身につけることや、意欲を向上させる取り組みについては、まだ工夫が迫られる結果となった。国際教育で評価が下がったのは、ネイティブの教員が一時的にいなかったためだと考えられる。さらにHPでの活発な発信が必要である。 ・担任のクラス経営については、引き続き高評価であった。</p> <p>○保護者 ・生徒と同様、安心・安全な学校の項目では、高評価であった。 ・これも生徒と同様、国際教育の項目の評価が低めであった。語学研修や国内での取り組み内容が、保護者にまでしっかりと伝えられていない面があると考えられる。 ・新教育の評価が生徒ほどには高くない。これもその意義をしっかりと伝える必要がある。</p>	<p>・中・高等学校の目指す方向についての理解が深まった。 ・ハワイ大との提携、SDGsを絡めたグローバルな課題に関心・興味を広げるさまざまな取り組みについて理解した。 ・すでに取り組まれている協働型・プロジェクト型の学びの成果が、推薦・AO入試での国公立大合格という結果となったことは良かった。教育力のある教員の育成をさらに進めて欲しい。 ・大阪北部地震後、限られた施設の活用、大学教室の利用などをせざるを得なかった状況なども、推薦度が下がった要因ではないか。学校側から説明を受け、その状況については一定理解した。 ・学院創立130周年記念式典に参加して、学院の目指す方向が発信され、また総合学園としての連携が感じられ、大変良かった。 ・学院創立130周年(2018)→新キャンパス移転(2019)→中高70周年(2020)といった事業を活かし、中・高等学校の躍進につなげて欲しい。 ・新キャンパスでの教育への期待から関心が高まり、高校からの入学生のレベルが上がっているように思う。中高六年一貫生に確かな学力を身に付けさせる指導を続けてもらいたい。</p>

4. 本年度の取組み内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 学院教育理念に基づく教育推進	<p>◇教育理念を理解し、学校の教育目標を達成する組織を形成する。</p> <p>◇「志の教育」「心の教育」という本校独自の教育を推進する。</p> <p>◇学院内でのさらなる連携に取り組み、総合学園としての強みを定着させる。周年事業を大切に、教育の成果発表の場として、社会的評価向上に努める。</p> <p>◇教育理念を共有し、これを伝えることで、志願者を安定的に確保する。</p>	<p>(1) 学校評価に際し、教育理念を踏まえた部門目標を設定・完遂することで、学校の教育目標を達成する。</p> <p>(2) 「志の教育」「心の教育」を各学年ともHRや総合的な学習の時間などで実践し充実を図る。</p> <p>(3) 創立130周年、両中高70周年を意識し、各校園とのつながりを大切に取り組み。総合学園としての活力を内外にアピールする機会とする。</p> <p>(4) 教育理念を全教職員が共有し、広報マインドをもって生徒募集活動にあたる。</p>	<p>(1) 学校評価における、学年、教科部門による目標</p> <p>(2) 具体的な取り組み内容、生徒によるプレゼン等取り組みの共有</p> <p>(3) 各校園との取り組み 式典に向けての成果発表の準備と具体的な取り組み内容</p> <p>(4) 志願者数、入学者数動向</p>	<p>(1) 前年度の課題を重点項目として意識して取り組むことができた。</p> <p>(2) 授業中や各種行事、またクラブ活動中においても、自分の考えていることをしっかりと発言できるようにしている。同時に、友達の話もしっかりと聴くことも大切にしている。郷中教育のエッセンスを採り入れた「丸郷」活動においては、上級生と下級生の交流も積極的に行われている。</p> <p>(3) 創立130周年式典に向けての取り組みで、各校園との合同の取り組みにおいて、人の流れを作ることができた。こども園から大学までの流れが作られたのは、法人全体においても、大きな成果であった。学びの成果発表ができたことも大きなプラスであった。小学校・大学とはさらに具体的な教育の面での流れを整備していくことが課題である。</p> <p>(4) 中学は、入学者77名、高校は452名であった。中学は志願者数が200名を超え、4年連続の増となった。高校は「人気校」となっており、入試においてもレベルアップを図ることができた。効果的な広報活動ができ、各入試イベントの動員数が増えたことで、志願者数増につながったと考えられる。</p>
2 「学習力」の強化	<p>◇新たな学びの取り組みに向けた教員組織全体の教育力の向上を促進する。</p> <p>◇新たな学びに関して、本校独自の学習システムを整備、拡充させる。</p> <p>◇生徒の学力向上に徹底的にこだわり、進学実績の向上につなげる。</p>	<p>(1) 教員の授業力や進学指導力向上を達成し、これを総合的な学校教育力に結びつける。</p> <p>(2) 教員の授業力のさらなる向上を目指すため、授業アンケートを実施し、その振り返りシートの作成を行う。また、授業を相互に見学する体制を構築する。</p> <p>(3) 学習推進・進路指導部が基軸となって各学年で学習指導・進路指導の取り組みを進める。</p> <p>(4) 個々の生徒について、模試の結果についての詳細な分析を行い、教員間での議論を経て、教育相談や進路指導を入念に行う。</p>	<p>(1) 公開授業・研究授業 大学入試問題の研究 外部セミナーへの参加</p> <p>(2) 授業アンケートの結果 教員主導の授業相互見学</p> <p>(3) 進学実績の向上 進路関係のイベント・保護者向けのイベントの開催</p> <p>(4) 模試分析会の開催 教員全体での出願指導会議の開催と情報共有</p>	<p>(1) 若手教員主体の公開授業が積極的に行われた。また、ICTを活用した新たな学びの授業展開も、Good Practiceの共有として、実施できた。外部セミナーへの参加、さらには他校視察に出かける件数も多くなり、職員会議棟で報告を行っている。</p> <p>(2) 授業見学を相互に行う体制は築けている。生徒に授業アンケートを行い、教員が振り返りを行っているが、各授業の終わりにおいても、リフレクションの時間を設けている。この結果も、教員の側での振り返りとなる。</p> <p>(3) 新たな学びを通しての進学実績向上が大きな課題である。国公立大学の推薦・AO入試において7名の合格者を出せたことは、大きな成果であった。</p> <p>(4) 毎年継続して取り組んでいる、模試分析と出願指導会議により、適切な大学入試の出願ができ、第一志望大学における高い合格率を実現できている。国公立大の推薦入試やAO入試での合格者が増えている。</p>
3 特色ある教育の推進と充実	<p>◇新キャンパスでの教育実践のための準備</p> <p>◇スポーツコース、表現コミュニケーションコースの充実</p> <p>◇国際教育の充実</p> <p>◇新しい探究を軸とした学びの準備</p>	<p>(1) 新キャンパスでの教育実践を考慮し、その準備期間としてICT活用や協働の学びを採り入れた授業展開にチャレンジする。</p> <p>(2) スポーツコースでは、総合学習の指導内容を充実させ、コースのミッションを再確認する。表現コミュニケーションコースでは、日々の授業や公演を通じて、活動の充実と成果の可視化を図る。</p> <p>(3) 英語の4技能について、中学・高校とともにさらに注力すると同時に、ユネスコスクールとしての活動をさらに推進させる。</p>	<p>(1) 「新たな学び」の実践 ICT機器活用の授業実践</p> <p>(2) 各コースの満足度 総合学習の充実 公演の実施</p> <p>(3) 模試成績 英検 SDGsを意識した学びと地域連携</p>	<p>(1) ICT機器を活用した授業や協働型の学びを採り入れた授業は浸透してきた。一方で、形だけになり、生徒の満足度が高まっていない授業については、改善を加えていく。授業アンケート、学校評価アンケートでの満足度に授業ごとの差が開かないようにする。</p> <p>(2) スポーツコース表現コミュニケーションコースともに、生徒・保護者の満足度は高い。スポーツコースは定員を上回る新入生を獲得し、表現コミュニケーションコースも、卒業公演を初めとした公演や入試イベントでのダンス・パフォーマンスでその成果を発表して、多くの方にアピールすることができた。</p> <p>(3) 4技能を意識した授業内容によって、特別な対策をせずに、英検上位級への合格者が増えている。また、ユネスコスクール認定校として、SDGsを意識した授業も行っており、地域との連携も含めて、Glocalな取り組みをさらに進めることが課題である。</p>

		<p>(4) 探究を軸とした学びへの移行の準備と、外部組織を活用した協働の教育プログラム構築の準備を行う。</p>	<p>(4) 新たな探究の授業の計画 外部組織との連携 先進校への視察</p>	<p>(4) 2019年度、中1と高1からスタートする、新たな総合学習・探究の授業計画を練り、完成させることができた。学内だけではなく、学外のリソースを活用して、協働で教育プログラムを作り上げる取り組みが始まっている。一部の教員だけではなく、全体で探究に取り組む体制を上げることが課題である。</p>